

春興鏡獅子

長唄

全詞章

福地桜痴 作詞

三代目杵屋正次郎 作曲

明治二十六年（一八九三）三月初演

〔上（小姓）・三下り） 樵歌牧笛の声、人間万事さまざまに、世を渡り行くその中に、世の恋草を余所に見て
われは下もえくむ春風に、花の東の宮仕へ、忍ぶたよりも長廊下
されば結ぶのそのかみや、天の浮き橋渡り初め、女神男神の二柱、恋の根笹の伊勢海士小船、
川崎音頭口々に

〔本調子・音頭〕 人の心の花の露、濡れにぞ濡れし鬢水の、はたち鬢の堅意地も、道理御殿の勤めぢやと
人に謡はれ結ひたての、櫛の歯にまでかけられし、平元結の高わけも、かゆいところへ平打ちの
届かぬ人につながれて、人目の関の別れ坂

〔三下り〕 春は花見に、心うつりて山里の、谷の川音雨とのみ、聞えて松の風、実に過つて半日の
客たりしも

今身の上に白雲の、其の折過ぎて花も散り、青葉茂るや夏木立

飛驒の踊りは面白や、早乙女がござれば、苗代水や五月雨、初の人にも馴染むはお茶よ、ほんにさ
うら恨みかこつもな、実からしんぞ、氣にあたらうとは夢々知らなんだ、見るたび見るたびや聞く度に
憎てらしいほど可愛ゆきの、朧月夜や時鳥

時しも今は牡丹の花の、咲くや乱れて、散るは散るは、散りくるは散りくるは
散りくるはちりちりちり散りかかるようで、おもしろうて寝られぬ

花見てあかそ、花見てあかそ、花には憂きを打ち忘れ

〔二上り〕 咲き乱れたる風に香のある花の波、来つれて連れて、顔は紅白薄紅さいて
見するは、見するは、丁度廿日草、牡丹に戯れ獅子の曲、実に石橋の有様は

〔三下り〕 その面わずかにして、苔滑らかに谷深く、下は泥犁も白波の、音は嵐に響き合ひ
笙歌の花降り、簫笛琴笙篋、夕日の雲に聞こゆべき、目前の奇特あらたなり

〔下（胡蝶）・鼓唄〕 世の中に、絶えて花香のなかりせば、我はいづくに

〔本調子〕 宿るべき、浮き世を知らで草に寝て、花に遊びてあしたには、露を情の袖枕
羽色にまがふ物としては、我に由縁の深見草、花のおだまき、花のおだまき繰り返し

風に柳の結ぶや糸の、ふかぬその間が命ちや物を、憎やつれなやその味さへも
わすれ兼ねつつ飛び交う中を、ぞつとそよいで隔つるは、科戸の神の嫉みかや

よしや吉野の花より我は、羽風にこぼすおしろひの、その面影のいとしきに、いとど思いはます鏡
うつる心や紫の、色に出でたか恥かしながら、待つにかひなき松風の

花にたきぎを吹き添へて、雪を運ぶか朧げの、我も迷ふや花の影、暫く木陰に休らひぬ

〔大薩摩〕 夫れ清涼山の石橋は、人の渡せる橋ならず

法の功德におのづから、出現なしたる橋なれば、暫く待たせ給へや、影向の時節も今いく程によも過ぎ

〔二下り〕 葉影にやすむ蝶の、風に翼かはして飛びめぐる、獅子は勇んでくるくるくると

〔本調子〕 花に戯れ枝に臥し転び、実にも上なき獅子王の勢ひ、獅子の座にこそなほりけれ